

書道研究誌

# 書道の光

5  
2024



Vol.669  
宮城野書道会



漢詩を味わう

第178回

同兎輩賦未開海棠

元好問

枝間新緑一重重

枝間の新緑 一重重

小蕾深藏數點紅

小蕾 深く蔵す数点の紅

愛惜芳心莫輕吐

芳心を愛惜す 輕しく吐くこと莫かれ

且教桃李鬧春風

且らく桃李をして春風に鬧がしめよ

枝の間には新緑がびっしりと重なり合い、  
小さな蕾が奥深く隠れ、ちらほら紅い色が見える。  
美しい花を大切に思うからこそ、どうか軽々しく咲かないでくれ、  
しばらく桃や李に春風のなかで騒々しく咲きほこらせておけばいい。

《兎輩》 子どもたち。元好問は再婚して四男五女をもうけた。

《一重重》 びっしり重なり合うさま。

《芳心》 花芯。美しい花。

元好問（一一九〇—一二五七）は女真族が漢民族を支配した金時代末期の人です。三十二歳で進士に及第し、金が蒙古の侵略により滅ぼされてゆく時期に生きた乱世の詩人で、杜甫の精神の継承者ともいわれます。この詩は元好問が子どもたちとともにまだ開花しない海棠を詠ったものです。海棠は桜と同じくバラ科の落葉樹で、満開の桜が散り始める頃に開花します。桜とは違い一月程にわたり花を咲かせますので、長く楽しめる花です。

海棠の紅い蕾をいとおしみ、今しばらくは咲き誇る桃や李に主役を任せて、軽々に咲かないようにと、語りかけるように詩を仕立てています。晩年の作と見られ、新しい支配者となる蒙古にすり寄っていく者たちを批判し、海棠の蕾のようにあくまで「芳心」を保つべきだという意味がこめられていてという解釈もあります。

前回の楊貴妃を詠んだ李白詩「清平調子」には牡丹が登場しましたが、玄宗皇帝は楊貴妃が酔い醒めやらず眠る姿をみて、「是れ海棠の睡り未だ足らず」と海棠の薄紅色の花の美しさになぞらえています。この事から海棠は「睡花」という別名が付けられ、海棠は牡丹の花と並んで美人の形容詞ともなっています。

蘇軾の詩にも海棠の美しさを詠う詩があります。「桃李山に漫るも総て麁俗なり（山に所狭しと咲く桃李はおよそ凡俗なもの）」だが、「名花ははなはだ幽獨なる有り」とし「清淑」とも海棠を形容しています。

金が滅亡したとき、重職にあった元好問は家族とともに山東省に軟禁されました。解放された後の晩年は、亡国金の遺民として生き抜き、金の歴史を後世に伝えるために正史『金史』の編纂に携わっています。

参考文献：中国詩人選集「元好問」（岩波書店）・漢詩の事典（大修館書店）

暮雲長く山径を繞り 春澗斜に水村に通ず 無数の深花自から落ち 知らず何れの路か桃源なるを

暮雲長繞山徑春澗斜通水村

无数深花自落不知何路桃源

高野蘭亭書

《大意》夕暮れ雲は長く山径をめぐり、春の澗（たにがわ）は斜めに流れて水辺の村に通じる。無数の色濃き花はひとりでに落ち、どの路が桃源に通じているのやら（高野蘭亭詩・小景に題す）

蓋し心に染着無ければ 欲界も是れ仙都

盖心無染著 盖心無染著

欲界是仙都 欲界是僊都

《大意》執着心が無ければ、俗界も仙境となる。（菜根譚）

※「着」と「著」はもと同字で「着」は俗字。現在は使い分けしている。

読み

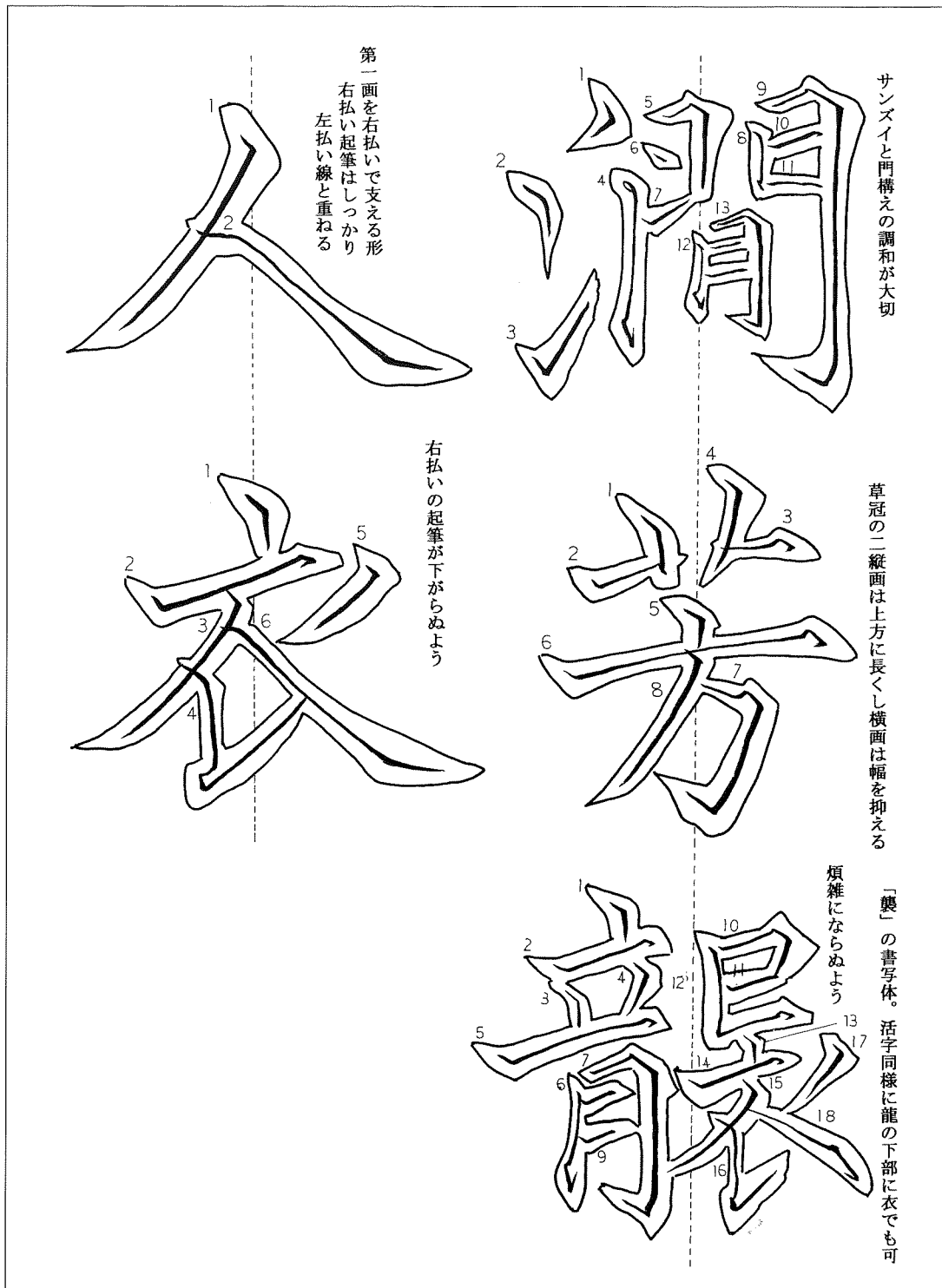
澗かんぼう芳

人衣ひとをを襲おそい

(谷間の花の匂いは人の衣にしみとおり)

澗  
芳  
人  
衣  
韻

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について  
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。  
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。  
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世間樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

潤芳襲人衣

潤芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

潤芳襲衣  
 人衣  
 潤芳襲衣  
 人衣

次号課題

隸書

潤芳襲衣  
 人衣  
 潤芳襲衣  
 人衣  
 山月映  
 石壁

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

	是ちこちに滝の音聞	支 部		順 位		氏 名	
若葉かな							

与謝蕪村

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

ネンシマイサイ  
キキロウヨウ

略解

光陰は矢の如く移っていき再び帰ることはない。  
曦(太陽)は輝き、暉(月)は光り影をうつして万物を  
めぐむ。



下則人 眞廣

下則人 眞廣

下は則ち冥に入り、廣(写)して……

人

象雲臨

■石門頌(後漢・西暦一四八年)の臨書 (13)

『下則入冥頌』

隸書は秦時代に公用書体だった小篆から、実用に適した簡略化された隸書(秦隸)が使われたのが始まりです。隸書は程邈という人物が獄舎の中で考案したと言われますが、これはあくまで伝説のようです。前漢時代(前二〇二)になり小篆から隸書時代に入って、その過渡期の波磔のない隸書は古隸といい、後漢時代の波磔のあるものを八分隸と一般的に言われますが、後漢時代の刻石にも波磔のないものがあり、古隸と八分隸の分類は便宜上のものです。石門摩崖刻石の初期の作品「開通褒斜刻石(後漢六六)」の字体は古隸に分類されることが多く、この石門頌は八分です。二碑とも摩崖碑ということもあり古趣があり、石門頌はのびやかで悠然としてその中に動感があり、嚴正ではありながら飄逸で古拙美を感じさせる古典です。

慨深文之訛

深文之訛か(びやう謬)を慨なげき……

慨深文之訛

■王羲之・集字聖教序(唐・西暦六七二年)の臨書 (27)

象雲臨

『慨深文之訛』

今月は「古典を作品に活かす」で集字聖教序を取り上げましたが、北宋時代の『宣和書譜』には、王羲之の書を学ぼうとすれば、必ずこの懐仁の集字による「聖教序」から始めなければならなかったと記載されています。一方で、この書体が翰林院でも長い間もてはやされたために、院体とも呼ばれていました。この隆盛について同じ宋時代の『東觀余論』では「翰林院の輩は多くの碑を学ぶが能く至らず、ついに高韻無し。学んで至らざるもの自ら俗なるのみ。碑中の字は未だかつて俗ならざるなり。」と述べられていて、その多くは卑俗な書に堕していたとも評されます。

集字聖教序の書は風韻が高く立派なのですが、これを学ぶ我々の学び方が浅く、これに基づいた書が俗になるということは大変耳が痛い話です。今月の文言は、「仏教の正法が衰退するのを悲しみ、深遠な經典の誤謬を慨く。」という意味合いです。王羲之の書が正しく学ばれず俗化して行ったことと共通するような内容です。